

低コスト生産技術習得による生産費削減

地域の先進的な10経営体が生産費の削減を目指して、疎植栽培や直播栽培の低コスト生産技術を実証した結果、玄米60kg当たりの生産費12,000円以下の目標を達成することができた。生産費を削減するためには、低コスト生産技術を習得して安定的に収量を確保することが重要である。

内容

兵庫県は玄米60kg当たりの生産費12,000円以下を目指して、2012年から2014年に「水稻生産コスト“12,000”実践事業」を実施した。当センターは大規模農家や法人組織の10経営体のうち疎植事例①②や直播事例①②の低コスト生産技術の実施事例を調査し、事例別生産費と作業時間を明らかにした(図1、2)。

(1) 疎植栽培

疎植栽培は主に㎡当たり11~14株植えて、苗箱数の削減で種苗費が減り、育苗や田植え作業の短縮で労働費も減った。疎植①②は鶏糞や緑肥(ヘアリーベッチ)等の利用で肥料費を削減したり、農業機械の稼働効率向上による減価償却費の削減を行った結果、生産費が10,000円前後になった。疎植②は緑肥のすき込みが不十分で、欠株や雑草が発生し、補植や除草作業が増えた。収量は疎植①で500kg/10a弱であったが、疎植②は水管理不足でガスが湧き、根傷みで茎数が少なく、減収となった。鶏糞や緑肥等の有機物をすき込む場合

は間断灌水でガス抜きを行い、茎数の確保が必要である。

(2) 直播栽培

直播栽培は育苗や田植え作業が省かれ、労働費はかなり削減できたが、雑草が発生しやすく、農薬費が増えた。直播①はカルパー湛水直播栽培で、カルパー種子の購入で種苗費が増加したが、JAに播種作業を委託して減価償却費が削減された。直播②は不耕起乾田直播栽培で、専用播種機の稼働率が低く、減価償却費は高くなった。直播①②は栽培技術が高く、収量500kg/10a前後で、生産費は10,000円前後であった。直播栽培は圃場の均平や適切な水管理で苗立ち率の確保や雑草の抑制を行い、収量の安定確保が必要である。

今後の方針

水稻の生産費削減は低コスト生産技術を習得することで可能になる。今後、各地域で10経営体をモデルに両技術を普及する。

九村 俊幸(企画調整・経営支援部)
(問い合わせ先 電話：0790-47-2433)

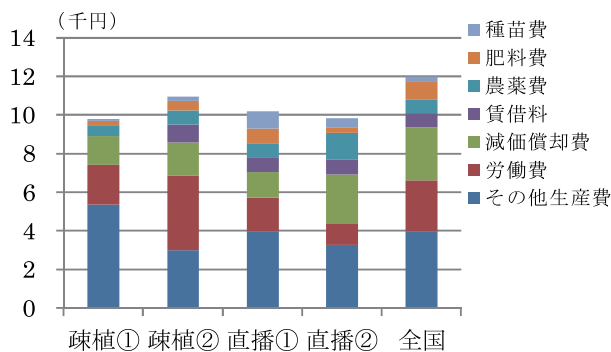


図1 玄米 60kg 当たりの事例別生産費

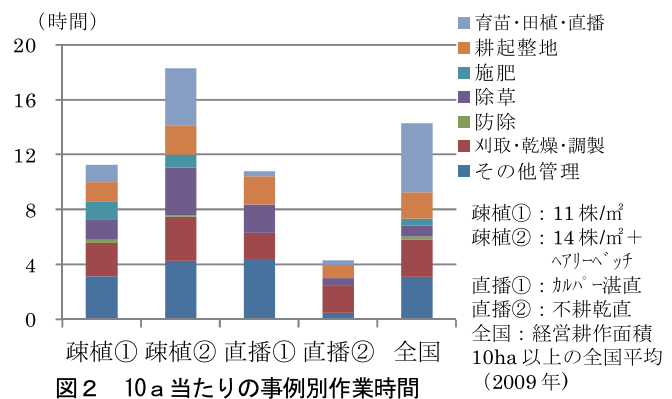


図2 10a 当たりの事例別作業時間